

宮本常一

宮本常一追悼文集

同時代の証言

三百余の生き証人が伝える
全国を歩き、教えた
“昭和聖”の実像

マツノ書店

内容見本



澁澤家



- 2 学位を得た祝いを澁澤敬三氏(右)にしてもらう。左は弓野はや。昭和36年12月。
- 3 澁澤邸の部屋で原稿に目を通す。昭和36年ごろ。
- 4 京都人文科学研究所で開催の民族学人類学合同大会記念。昭和26年10月27日。



■本書グラビアより「澁澤家」の部分

応接間に案内されて、前のソファには宮本先生を真中に前田国内旅行部長と日本観光文化研究所事務局長の神崎さんが坐り、私は司馬先生の横に坐ったが、玄関を入ったときからお話をはずんでいたとしか形容できない。

お話は莊重、高見、多彩、明快、鮮烈であった。博覽強記の両先生のとどまるところをしない縦横な卓説を、私はただぼう然とお聞きしているだけでした。

いまでも、そのお話ぶりや内容が耳朶に残っている。とくに、強く残っているのは、長州藩の風土と氣質についてのお話と西南戦争における西郷隆盛の行動に関するお話で、拙いながら要約するつぎのようであった。

〔……長州藩は、関ヶ原の戦後、その領地を大幅にけずられ、それまでの山陽・山陰十ヶ国から防長二ヶ国におしこめられる。

武士階級は富裕でなくなり、藩をあげて貧にたえ、産業を興すことになる。塩、紙、蠟、藍などの専売をおこなう一方、大内氏時代からの貿易的性格から、北前船でそれらの製品を日本海沿いに蝦夷まで売り、帰路は蝦夷の昆布や鮭を大阪へ運んだ。

これは明治政府のスローガンである富国強兵・殖産興業の原型ともいえよう。そのため、長州では才能のある者が上にたつ。力のある者が庄屋にたつという、いわば官僚制ともいえる人材

本位の社会が近世初期から生じていたのである。

鎌倉以来、日本の社会が持続してきた階級意識というものはたいへんなもので、家柄、門閥を大切にすると他藩から見れば、長州藩は異質にみえたにちがいない。

この家柄などでなく、人の力を大事にする藩の氣質が大村益次郎などを出現させた。また長州から四国の中へ大工や屋根ふき職人などがよく往き来していたことが、長州と四国には人のつুক্ত道が早くからできていて、これらが下地となつて、他藩の人でも有能な人はたやすく受け入れられる、例えば坂本竜馬や所郁太郎などもそうではなかったかとおもえる……〕

〔……西南戦争における西郷隆盛と私学校の関係はまことに不可思議なところが多い。

西郷はすべてを達観して運命に身をゆだねてしまったような挙動をしている。

これは、日本の風土にある古代以来の南方的要素である若衆組（若者組）の行動と関係があるのではないか。

若衆組は日本でも特に西日本の農村社会を特徴づけてきたもので朝鮮や中国にはない。

日本の文化は北方的なものと、南方的なものとの重層であるのにもかかわらず、北方的要素の民族性というか家父長的な存在

■中井泉氏の文章の一部分です。これとは別に、司馬遼太郎氏の感動的な文章も載っています。

今ひとつ忘れられないのは、食事を共にしながらうかがったお話のひとつである。大阪近傍の、おそらく佐野かどこかであったろう、さる漁師が、急に玄界灘なるものを見たくなつて、ひとを語らつてそこへ出かけた。何日かの舟旅で音に聞く玄界灘の荒海に出て、連れは満足して引き返したが、彼はさらにその先が見たくなり、凧を待つて海を渡つた。玄界灘の真ん中にあるという赤い線は、ずいぶん気をつけていたが見あたらない。こうして海を渡つたあとも、次々とその先が見たくなつて、釣った魚を売りながら先へ進み、気がつくると海のような泥水の川にはいつて、どうもシナまで来たらしいので、それから引き返したという。

その後宮本さんがこの話を淡路島のどこかで話したところ、わしも似たようなことをやったという老漁師があらわれた。同じように玄界灘を渡つたのだが、それ以上には行かなかつた。

そこでは魚がよくとれて女どもも寄ってくるので、三、四人女房を持つて魚を売らせ、左うちわで暮らしたという。

ところがそのうちにひよいと気がついて、くにも女房がいた、あれはどうしているだろうかとまた淡路へ帰つてみると、もとの女房はもう何十年も昔に再婚して何人もの子供を持つてゐる。そんならそれでよしと、また朝鮮へもどるのも億劫だから、こうしてまた一人で暮らしているとのことであつたという。

やはり一九七八年のころ、宮本さんにねだつて、十数人のプロジェクト・メンバーとの三浦半島の民宿での合宿につきあつていただいたことがある。夜おそくまで話は尽きなかったが、翌日、漁港になつているとなりの浦での宮本さんの聞取は庄巻であつた。

網づくりをしている若い漁師に話しかけた宮本さんの姿は、通りすがりの人が世間話をはじめたときかみえない。漁師の側もそういう自然な感じであいつちを打っている。しかし、おもに漁法についてであつたと思うが、聞いていておどろいたのは、とめどなく良い質問がつきつきに織りまぜられていることであり、また、漁師の情報提供へのお返しもけっこうあるということであつた。そういう他の地方の役に立ちそうな話が出たりすると、漁師の側もふと網づくりの手を休めて耳をかたむけたりもする。

私も海外調査で聞取のまねごと程度のことをやってきたが、その場合いつも痛感するのは、結局人間は自分の知っていることしか訊けないということ、そうして自分がいかにもを知らないか、ということであつた。いわんやインフォーマントへのお返しをする余裕などおよそない。そういう私から見ると、宮本さんの自在な聞取の姿はまぶしいほどのものであつた。

そういう宮本さんの姿はいまはない。(三木 亘)

宮本常一断章

この生き方を見よ

本書中にある無数の名文より厳選し、仮題を付す

こんな大学教授―工藤員功

宮本先生は、私が抱いていた大学の教授というイメージとはかけ離れた風体で、ここにこしながら日本の各地のこと、いろんな人のことを語り、人々の生活、文化といったものをいかにも面白げに話して下さり、「どうじゃ、面白いじゃろうが、エヘヘ」というのだから、たいていの人間ならおもしろく思わないはずがない。話の内容が、自分にとつてはまったくの未知の世界なだけによいにおもしろい。しかも、会うたびに新しい話をどんどん聞かせてくれ、時には駄洒落を織り交ぜながら、あの人を飲みこむような笑顔を見せるのだからたまったものではない。

研究者の見た宮本先生―坪井清足

戦後だからリュックサック姿は珍しくなかったが、研究室で、「ちよつと失礼して飯にします」とリュックから一斗缶を出し、アルミのコップにその缶からハツタイ粉をとり出し、水も入れずにスプーンで食べられるのには、全く驚いた。それだけでなく話ときたら、「どこそこでは……」「どこそこでは……」、当方は話がわからないから、「先のどこそこは何処で、後のはどこですか」と聞くと、「先のは秋田の山奥、後のは宮崎の……」と全くよく歩いているだけでなしに、まことにすぐれた観察眼。いつも話に聞きほれるが、すむと飄々と出て行くといった按配。

信州と越後境にいる猟師が、関ヶ原の辺りで鉄道をこえ、人里に出ないで、山づたいに奈良県の十津川にまで熊をとりに行く。時に里の人と物を交換することがある程度で、猟を終ると一週間ほどで村に帰りつくという話。縄文時代の東北地方で作られた土器が、近江や大和で出土するのは、思わぬ媒介人がいたのではないかと考えさせられた。

中央集権をぶつこわせ

河内敏夫

「……僕の夢は、はつきり言うとな、地域主義なんだよ。それが昔から夢だったんだ。百姓のせがれだったからね。それぞれの地域社会が生き生きしてくることが、世の中で一番おもしろいんで、もういつぱん地方が中央に向かって反乱を起こさなきゃいけないと思うんだ。田舎にそういつたエネルギーがあるように思うんで、それが無くなったらね、国つていうのは減びるんだらう。今はもう、完全な

憂国の中学教師

岩井宏實

この絶えず語られた「日本は負ける」という話も、実は日本の前途を案じる先生の憂国の至心からであった。だからその話のあとにはかならず、戦が終わったら我々はどうせねばならないかを語られた。ここでは、村むらの暮らしの歴史と、苦難を生き抜いてきた名もない人びとの話、村人の暮らしを豊かにする事例などを滔々と語られ教えられた。

すべてを若者に

谷沢明

「私は歩くこと、書物を読むこと、そして若い者と話をする以外に、およそ楽しみのない人間である」と、先生はよく口にされていた。たとえば役所主催の講演会のあとで、次の座敷に誘われても「若い者がハラをすかしておりますので」などと軽妙に断り、帰りがけには、話を聞きに行った若い人間を喫茶店に誘っては講演の補足をするという具合であった。聞くところによると、先生の交際費の多くは、学生の食事代や喫茶代に消えていたらしい。教えを受けようと集まってきた人間に対し、先生は門戸を広くあけ、わけへだてなく親身になって指導されたのである。

おれたち村人に夢を

高木秀樹

その夜、父は言った。「うちには、随分偉い先生が来る。そして、この俺から資料を持ち帰り、本を出している。しかし、この俺に、これから村をどうしたら良いか、どうしたらくらしが良くなるか、教えることが出来ない。そんな、へぼな学者になるんじゃない」
「しかし、宮本先生は、ちがう、おれたち村人に夢を託していく先生だ」

日本八分割論

平田守

七年位前、三原から広島まで先生と同じ列車に乗った車中でのまさに先見の明を感じさせられた話。日本のような狭い国を四十七もの都道府県に分けることの不合理。そのようなことは廃止して、行政区域を北海道、東北と八つの地方に分けてしまえば、あらゆる面で合理的である。それもただの机上論ではなく、あらゆる角度から計算してのこと。大変に無駄が省け非常に有利である。実行できたら大きな革命だと感動して拝聴した。先生は離島振興対策でも大きな業績を残しておられる。

体裁は本質を損なう

小野塚功一

中央集権寺代。しかい、

それをね、もういっぺんぶっこわしてね。人間が生きているっていうことはどういうことなんだっていうこと、それを問いつめていく、どうじゃろ、それを君たちやってみないかね。なあ、やろうや……」

会誌が余りに地味だったので、その変更を進言したことがあったが、先生は、「タイプ刷りで地味だから価値があるんじゃないやあ。活版などにして体裁をよくすると、書くものが構えてしまい、読ませることを意識し、本当のことや大事なことを書き落とすことになるんじゃないやあ」といって全く相手にしてくれなかったものである。

万葉人の心——小谷方明

宮本君自身も、「万葉集を暗唱するまでに読みふけたこと」によって、その後の旅に大役役に立つことになる。ほんとうの旅は万葉人の心を持つことによって得られる」と書いている。

宮本学を浮き彫りにする「証言」——米山俊直

先生の学問については、これからもさまざまな評価がなされるだろう。十年後、あるいは百年後にも、それぞれの時代の評価が生れるのではないか。先生が菅江真澄について試みられたようなかたちで、先生ご自身も日本の文化伝統の中に位置づけられてゆくことだろうと思う。

しかしそのためには時間がかかる。そして先生の学問についての評価の根拠は、後世になればなるほど、その御著作によるしかないことになる。柳田学、折口学についても、いまとなればその著作について「研究」するほかはなくなくなってしまった。宮本学についても、おなじことが予想されるだろう。そのとき、直接先生を知っている人たちの証言が、大きい意味をもち、生きるのではないだろうか。

宮本常一美術論抄

田村善次郎

以下はその時のきれぎれなノートのさらにきれぎれな抜書、宮本常一先生美術論抄である。

一四日朝、法隆寺

○建築様式は素朴、南大門の榭組に雲形腕木を使い、人形割束が使われているなど支那の石造建築の影響が強く見られる。

○固定形式を破ってゆくことによって人びとの自由意志が仏教の中に働く。また、それによって人はしばられてゆく。

○線がなめらかで柔和になる——静かになると同時に人間性がなくなるのが平安時代の特徴、それは仏教が民衆の心をやくり動かすものから、固定化された上流のものとなってゆくことでもある。

■本書「正編」は二十二年前、宮本常一先生の没後、その愛弟子たちが全国の関係者に呼びかけ、わずか三ヶ月で上梓して師の霊前に捧げた追悼文集です。

■不肖私も、出版の仕事が始めたころ宮本先生に手取り足取りお世話になり、そのことは本書に書かせて頂いた通りです。その後も「時流に乗るな」「落ち穂を拾え」など、先生の教えを愚直に守ることで、崩壊寸前の出版業界を何とか生き抜いております。

■小社ではこのたび、発行直後から入手困難で一般読者には幻の本となつている本書を、関係各位にお願いしてここに復刻させて頂くことになりました。

正編

『宮本常一・同時代の証言』(宮本常一先生追悼文集編集委員会編1981年刊)を原本通りに復刻するもので、258名に及ぶ関係者の追悼文を、下記の種類でまとめてあります。

- ①「口承文学」とそのあとさき
- ②常民文化とそのまわり
- ③農村指導と学問と
- ④学の広がりと深まり
- ⑤離島振興と山村調査
- ⑥「忘れられた日本人」のあとさき
- ⑦塩業研究の友人たち
- ⑧武蔵美・発掘・生文研
- ⑨京を中心にした知友
- ⑩広き交友の中から
- ⑪民具学を進める人びと
- ⑫旅づくりの夢を共にした人びと
- ⑬「あるくみるきく」の仲間たち
- ⑭映像と芸能を通じて
- ⑮瀬戸内の仲間たち
- ⑯ふるさと島から ⑰親と子、妻と夫

続編

武蔵野美術大学教授・田村善次郎編で、入手困難な「しま」「未来」「生活学会報」「近畿民俗」「日本観光文化研究所研究紀要」「あるくみるきく」ほか専門誌の「宮本常一先生追悼号」あるいは奈良本辰也、谷川健一氏などによる新聞の追悼文も含めて1冊にまとめました。各分野における活躍を、とくに「近畿民俗」では戦前、若き日の先生を知ることができます。

体裁 A5判 正統各580頁 並製
定価 正統編セット 6,000円(〒税込)
出版部創設30周年記念特価
5,000円()

特価締切 平成15年11月末日
発売 平成16年1月中旬予定
▶書店にはありません 直接お申し込み下さい

 マツノ書店

〒745-0032 山口県周南市銀座2-13
☎0834-21-2195 FAX32-3195

■今回は左記のような「続編」をつくり「正統編セット」にしました。その巻末に掲載する二十頁に及ぶ本邦初の田村善次郎編「宮本常一略年譜」は、読み物としても先生の生涯を俯瞰できる力作です。

■この二冊は「過去を学び、現代に生かす」ことで日本を蘇らせようと、全国をくまなく歩き、教えた「昭和聖」の生きた姿を等身大で伝える「同時代の証言」であり、唯一・最大の宮本常一資料でもあります。

■本の産直を売り物にしている小社は、全国どこへでも「電話一本・即日発送・代金後払・返本OK」です。どうぞ気軽にお申し込み下さい。 マツノ書店 松村久